



じゃっど新聞

No.86号

発行日：2026.2.28
発行人：帖佐理子 / 発行：じゃっど事務局
895-0051 鹿児島県薩摩川内市東開間町 3-1
TEL/FAX 0996-27-0193
e-mail info@jaddo.or.jp
<https://www.jaddo.or.jp/>



踊りでつながる国際交流ラオスの子どもたちとソーラン節 / 2025.12 フォンミーヌア小学校にて

理事長挨拶 / 理事長 帖佐理子

寒い日々をいかがお過ごしでしょうか。じゃっどツアーでの暑かった年末を思います。

2025年はラオス人民民主共和国誕生 50 周年でした。そして日本ラオス国交樹立 70 周年でした。(日ラオス外交関係樹立 70 周年記念 で検索ください。YouTube 他外務省からの情報あり) 皇室から愛子様(Princess Ubolratana)がラオスを御訪問されました。日本のメディアで連日報道されましたので、皆さまご覧になったことでしょう。愛子様はラオス国家主席から贈られたラオスの民族衣装(シンというスカートとパービアンというスカーフ)をお召しになりお寺他を訪問されました。「ラオス国でシンを着てくださってありがとう。」と SNS に多くあがったそうです(ラオスでは携帯電話での Facebook が日常的に使われています)。

また、ラオスは、青年海外協力隊が最初に派遣された国です。1965年12月に5名の協力隊が派遣されたそうです。海外協力隊派遣 60 周年でもありました。この最初の頃の派遣の方々が、じゃっどの活動を多くサポートくださっています。横林宙世様、横林明雄様、故斎藤様、奈良様、そして、その後の派遣の方々・神庭光春様、木場貞成様、北村愛様ありがとうございます。ラオス以外への派遣 OB の方々からも支援いただいております。改めて感謝申し上げます。

今後もラオスと日本の友好が続く中、じゃっどの活動を続けていきたいです。

令和7年度後期じゃっと活動記録 2025/9/1-2026/2/28

(1) JICA 九州地区支援団体ブロック会議

令和7年9月13日(土)14:00~16:30 独立行政法人国際協力機構九州センター (帖佐事務局長)

(2) 国際交流フェス 3020

令和7年10月4日(土)10:00~15:00 薩摩川内市国際交流センター (古田理事・神崎理事・叶事務局長)

(3) 福岡アジア文化賞歴代受賞者による講演会

「ラオスの織物に宿る神話 ~ナーガ文様の意味と未来~

令和7年11月3日(月・祝)13:00~15:00 JR博多シティ 10階 (帖佐理事長)

(4) 北薩リハフォーラム 2025 講演「ラオスポリオ根絶の経験」

令和7年11月29日(土)13:30~16:30 薩摩川内市国際交流センター (帖佐事務局長)

(5) かごしま”職”の魅力発見プロジェクト「高校における県内企業等による出前講座」

令和7年12月2日(火)11:25~12:25 甲南高校 (帖佐事務局長)

(6) 臨時理事会

令和7年12月2日(火)15:00~17:00 じゃっと事務局

(7) じゃっとスタディツアー2025 第2回事前説明会

令和7年12月7日(日)14:00~16:00 SSプラザせんだい 103 研修室

(8) じゃっとスタディツアー2025

令和7年12月25日(木)~12月31日(水) ラオス

(9) 鹿児島県 JICA 派遣専門家連絡会令和7年度定例総会参加 及び

JICA 市民公開講座「国際性豊かな青少年の育成事業」 弓場秋信氏講演 企画

令和7年12月20日(土)13:30~16:30 鹿児島市国際交流センター (帖佐事務局長)

(10) 薩摩川内市市民活動ネットワーク会議・説明会

令和8年1月23日(金)13:00~14:00 SSプラザせんだい 104 会議室 (神崎理事)

(11) 薩摩川内市市民活動ネットワーク会議・新組織発足会

令和8年2月10日(火)18:30~20:00 SSプラザせんだい 302.303 会議室 (帖佐事務局長)



令和7年度は、北薩リハフォーラム講演、高校での出前講座、国際交流フェスなど、さまざまな場で国際協力の取り組みを紹介する機会に恵まれました。

北薩リハフォーラムでは、じゃっと事務局長が登壇し、また、元 JICA 海外協力隊員でパプアニューギニアにて理学療法士として活動された長嶺さんも登壇され、それぞれの立場から現地での経験や国際協力への思いをお話しされました。ラオスでのポリオ根絶の経験や、

青少年の国際性を育む活動は、多くの方に国際協力を身近に感じていただくきっかけとなりました。こうした一連の活動を通じ、地域と世界をつなぐ交流の大切さを改めて実感しています。

今後も、学びと出会いを大切にしながら、国際交流・国際協力活動を発信していきます。



ラオスの織物文化に触れるひととき

じゃっと新聞 85号でご紹介した「じゃっと」のロゴマークをデザインしてくださった PUI さんの母上である、ドアンドウアン・ブンニャウオン (DOUANGDEUANE BOUNYAVONG) さんの講演会に参加してまいりました。

ドアンドウアン・ブンニャウオンさんは、1947年ヴィエンチャン生まれ。タイ・ラーチャパット・ロイエット大学卒業、名誉文学博士であり、作家・織物研究家として国内外で高く評価されています。

2005年には第16回福岡アジア文化賞、2006年には東南アジア文学賞（受賞作『森の魅惑』）を受賞。現在は、テキスタイル博物館「ランド・オブ・バンブー」代表、DOKKED 出版編集長を務めておられます。



じゃっとが2003年から2005年にかけて、JICA 草の根パートナーシップ事業をはじめとする助成金を活用し、ヴィエンチャンやウドムサイ県で行ってきた活動では、中心的な役割を担われた吉田いつこさんが、ドアンドウアンさんに協力を依頼しました。

その際、小学校教員向けに教材を活用した保健指導方法をご教授いただき、こうした活動が評価された結果、ラオスでは学校保健の取り組みが本格的に始まりました。



また2023年には、ラオスの伝統織物のユネスコ無形文化遺産登録にも大きく貢献されました。特に、織物に繰り返し登場する「ナーガ（龍神）」の文様が、無形文化遺産として登録されています。

ナーガは龍であり、水の神であり、天と地を結ぶ存在とされています。ナーガ文様を織ることは非常に難しく、「ナーガを織れなければ一人前の織り手とは言えない」とも言われるそうです。双頭の蛇、二匹一對のナーガ、つがいのナーガ、子を身籠ったナーガ、驚いているナーガ、くりくりとした頭のナーガ、角を広げたナーガ、橋を渡るナーガなど、さまざまな姿が織物の中に表現されており、その種類は90にも及ぶとのことでした。白い蛇は「良い知らせをもたらす存在」とされ、ナーガは神というよりも、人に近い存在として語られているのが印象的でした。

ラオスでは1975年（ベトナム戦争後、ラオス人民民主共和国建国）以前、ほとんどの村で各家庭が織物を行っていました。しかし戦争の影響により、多くの人々が難民としてカナダ、オーストラリア、フランスなどへ移住しました。戦争時代の織物には、敵を威嚇するような文様が使われることも

あったそうです。

また、伝統的で高度な技術を要する織物を担う人材が減少、あるいは表に出てこなくなった時代もありましたが、ここ10年ほどで、再び難しい織が世に出回るようになってきたとのこと。

ラオスの昔話に登場する想像上の生き物——頭が象で体がライオンの「シーホーン」、頭が象で体が鳥の「ハッサンディン」など——も織物の中に数多く見つけることができます。かつて廃れかけた民話文化も、織物とともに再評価されています。

草木染めや染料の作り方、織りの技術を、かつてのように各家庭で伝承していくことは難しくなったため、職業訓練所を立ち上げ、次世代への継承に取り組んでおられます。今後も民話を含めた文化を、未来へと伝え、広げていきたいという強い思いが語られました。

当日は、ラオスから持参された貴重な古い織物を実際に広げながらのお話で、その一つ一つに込められた物語と歴史を、間近に感じることができました。

パワーポイントは英語とラオス語でしたが、日本語通訳が非常にわかりやすく、内容が深く伝わってきました。通訳を務められたのは、NPO「ラオスのこども」のチャンタソンさん。ドアンドウアンさんとは古くからのご友人だそうです。私自身も、チャンタソンさんとは約30年のお付き合いになります。

会場には、吉田いつこさんも広島から駆け付けてくださり、じゃっとのロゴの話をはじめ、ウドムサイ県で行った学校保健プロジェクトの思い出を、皆で語り合うひとときとなりました。

最後に、ドアンドウアン・ブンニャウオンさんは、ラオス織物に関する書籍も出版されています。現在、その書籍はじゃっと事務局に所蔵しており、今後、事務局へお越しの際や総会の機会などに、皆さまにご覧いただけるよう準備しています。

講演で語られた世界観や織物文化を、ぜひ書籍を通して感じていただければと思います。

(帖佐 理子)



2025年度じゃっとスタディツアー 行程報告

2025/12/25-31(参加者 14名:高校生 6名、大学生 2名、社会人 6名)

■ 12月25日(水)

鹿児島出発直前、参加者2名よりインフルエンザ罹患の連絡があり、やむを得ずキャンセルとなった。

10:00-12:55 福岡 → ハノイ (VN357)

16:40-17:40 ハノイ → ビエンチャン (QV312)

ラオス側カウンターパートである Nounou さんご家族の空港出迎えあり。Nounou さんは直前に右足第5趾を骨折され、固定ギプス・両松葉杖という痛々しい状態であったが、それでもツアー運営に参加していただき、深く感謝する。チャンタパンニャホテルにチェックイン後、繁華街のラオス料理店にて夕食。

その後、携行物品の確認および仕分けを行った。

■ 12月26日(木)

08:30 ホテル出発

09:30 サムケー (Samket) 小学校訪問

セレモニー(絵本・遊具供与式)、子どもたちのパフォーマンスを鑑賞後、交流を実施。学生によるソーラン節ダンスは子どもたちに大好評であった。校長の Phimpha 先生は今年度で退官予定とのことで、新校長とも面談を行った。

11:15 Keng Pa Yang Restaurant にて昼食

13:30 ハッサيفون (Hadsayfong) 郡 村レベル・ヘルスセンター訪問。郡保健部副部長 Dr. Ketmany、センター長 Dr. Khamsamore が対応。ラオス側カウンターパートの Dr. Maniphanhg が通訳兼解説を担当。日本の保健所とは異なり、治療も行う点が特徴的であり、村のヘルスボランティアと連携した母子保健・予防接種活動が機能していることを確認した。

15:00 ショッピング等

17:30 Poy Sian Lao BBQ (焼肉) にて夕食

同席いただいたラオス JICA 事務所の虫明さん(在ラオス数十年)より、ラオスに関する貴重なお話を伺う。また、民族楽器「ケーン」の演奏も披露いただいた。夜、通訳の小畑愛花さんがビエンチャンに到着し合流。



■ 12月27日(金)

06:00 ビエンチャン県へ出発

07:00 フォンミーヌア (Phone Mee Neua) 村寺院にてタクバーツ見学。村のお祭りとなり、祈りや托鉢体験に参加。お坊さんへのお布施や食事の提供のほか、村人にも炊き出しの麺(フォー)や串焼きが振る舞われた。

08:30 フォンミーヌア小学校訪問

ハンドオーバーセレモニー、子どもたちのパフォーマンス、交流を実施。学生によるソーラン節ダンスがここでも好評。Bounxou 校長が対応。

10:30 昨年度ホームステイ先ホストファミリー訪問、昨年参加者からのメッセージを伝達。

12:00 ムアンカオ (Muang Kao) 小学校にて昼食

13:30 ムアンカオ小学校訪問

ハンドオーバーセレモニー、子どもたちのパフォーマンス、交流を実施。新設トイレおよび昨年度供与した浄水器の稼働状況を確認。Pock 校長が対応。



15:30 ビエンチャン市へ帰投
18:00 ベトナムレストラン Nemshihom にて夕食

■ 12月28日(土)

学生1名が体調不良のためホテルにて休養。帖佐徹事務局長も対応のためホテル滞在。

08:30 他の参加者はビエンチャン県へ出発
10:00 集会所にて昨年のホストファミリーと再会し、日本からのお土産を手渡した
10:40 グアバ農園見学
12:00 ナムグムダム見学(道路工事のため湖畔までは行けず)
13:00 ダム付近のラオ料理屋にて昼食
17:00 トウクトウク移動でナイトマーケット見学
18:30 Samyek Pakpasack(海鮮料理)にて夕食



■ 12月29日(日)

08:00 出発
09:00 Hadsayfong 郡病院訪問
地域医療の中核病院として、患者統計や外来診療の様子を視察。
10:30 タドゥア(Tha Deua) 小学校訪問
ハンドオーバーセレモニー、子どもたちのパフォーマンス、交流を実施。Viengsavanh 校長が対応。その後、成人参加者1名が体調不良となり、帖佐徹事務局長同行のもと Hadsayfong 郡病院を受診。救急科の Ketmanisone Xaiyasah 医師が対応し、加療を受けた。午後はホテルへ帰投し休養。他の参加者は Don Savang 中学校訪問等の活動を継続。
16:00 Sinouk Coffee にてコーヒータイム
17:30 Pizza Pompeii にてラオス側との晚餐会。虫明さんご家族にも参加いただいた。

■ 12月30日(月)

08:30 チェックアウト
09:00 サイモンコン(Xaymongkhoun) 小学校訪問
ハンドオーバーセレモニーを実施。朝礼や朝の体操、子ども同士による読み聞かせなど、興味深い教育活動を見学。Inpeng 校長、Khamphy 先生が主に対応。今回のラオスでの子どもたちとの交流は、これが最後となった。
11:00 Khao Soi Place(麵食堂)にて昼食
12:00-16:00
帖佐理子・徹は長年のラオス側カウンターパートである Dr. Kongsap を訪問。
他の参加者はショッピング、市内観光等を実施。
19:45-20:55 ビエンチャン → ハノイ(VN9200)



■ 12月31日(火)

01:55-07:35 ハノイ → 福岡(VN358)
福岡空港にて解散。
高校生は社会人参加者と共に新幹線で鹿児島へ帰着。

(文責) 事務局長 帖佐 徹

2025年度じゃっとスタディツアー 学校支援活動報告

2025年スタディツアーでは、現在支援を継続している以下の4校を訪問した。

- サイモンコン小学校 (Xaymongkhoun) 全校児童80名、教師5名
- サムケ小学校 (Samket) 全校児童150名、教師6名
- フォン・ミー・ヌア小学校 (Phone Mee Neua) 全校児童107名、教師6名
- ムアン・カオ小学校 (Mouang Kao) 全校児童270名、教師11名

また、上記4校に加え、今後の支援校候補として、以下の2校を新たに視察訪問した。

- タデア小学校 (Tha Deua)
- ドンサヴァン中学校 (Don Savang)

物資支援・配布内容

サッカーボール、ドッジボール、バドミントン用品、縄跳び、セパタクロー用品、石鹸、歯ブラシ・牛乳等に加え、今年度は新たにフラフープおよびじゃっとオリジナルサッカーユニフォームを配布した。

特にサッカーはラオスでも人気が高く、サッカーユニフォームは子どもたちに大変喜ばれていた。このユニフォームは、左胸にじゃっとの新ロゴマークをワンポイントとしてデザインしたもので、ラオス側カウンターパートの Nounou さんに発注いただいたものである。

フラフープは、子どもたちだけでなく先生方も一緒になって楽しみ、皆が輪になって回して遊ぶ様子が見られた。想像以上に上手な子どもが多く、終始笑顔に包まれていた。



翻訳絵本支援

絵本は、スタディツアー参加学生および国際交流フェスで翻訳体験に参加して下さった7名の協力により、新たに40冊を購入した。また、昨年度までに購入していたものの、ラオスへ運ぶことができていなかった絵本約20冊を加え、計60冊を各小中学校へ配布した。

【2025年購入 絵本タイトル】

- 『こぐまちゃんとふうせん』／わかやまけん
- 『あーんあん』／せなけいこ
- 『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』／五味太郎
- 『どろんこハリー』／ジーン・ジオン
- 『わたしとあそんで』／マリー・ホール・エッツ



新しく訪問した学校のうち、中学校では「絵本は読まないかもしれない」と想定していたが、実際には生徒たちが声を出して笑いながら楽しそうに読んでおり、その反応が非常に印象的であった。

また、サイモンコン小学校では、朝の活動の中に読書の時間が設けられており、じゃっとから寄贈した新しい絵本を、全校児童の前で読み聞かせてもらう機会もあった。

(文責) 理事 神崎 弥生

ラオスタディツアーでの学び

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻3年 小玉悠月

私が国際支援に興味をもったきっかけは、小学校の頃に見た発展途上国の現状を伝えるユニセフのビデオでした。痩せてハエが止まっても振りはらう気力のない子どもや泥混じりの水を飲まざるを得ない子ども、生まれて間もなく命を落としてしまう子どもなど、今まで当たり前だった日本の環境との違いにカルチャーショックを受け、「自分の力で支援に携わりたい」という思いから、JICA やユニセフなど人々の“生きる基盤”を整える国際支援に興味を持ちました。看護師を目指しているきっかけも、現地で支援を行う時、何も知識を持たないまま関わるのではなく、医療の専門知識を活かしてより質の高い支援をしたいと思ったからでした。スタディツアーは、JICA 派遣経験者の講演会でじゃっどの理事長さんと出会い、私の将来の夢をお話したところ、発展途上国の現状を知ることができるラオスタディツアーを紹介していただいたことが参加のきっかけでした。

今回のツアーでは小学校を訪問し、教育資源やスポーツ用品、衛生用品、薬剤などを届けて現地の子どもたちと交流する活動や村の病院を訪問し、ラオスの保健衛生環境について学ぶ活動、托鉢やホームヴィレッジ、観光などを通してラオスの文化を学ぶ活動を行いました。

1. 小学校訪問



小学校訪問では、まず校長先生が子どもたちに対して、じゃっどの説明と支援物資の説明をしてもらいました。小学校ではじゃっどのことを“小さなお医者さんプロジェクト”として紹介し、ラオスの子どもたちの衛生と教育環境の向上を目指して活動している団体であると説明がありました。

次に子どもたちから私たちに向けてのダンスや読み聞かせのパフォーマンス。ダンスを見ている子どもたちがラオ語の歌を歌っており、小学校一体でパフォーマンスしてくれている姿が印象的でとってもかわいらしかったです。そしてダンスや歌を一生懸命練習してくれていたことが伝わり、感動しました。



そして私たちからのパフォーマンス。日本らしいパフォーマンスがしたいと思い、法被を着てソーラン節を披露することにしました。出発前から各自で練習し、ホテルでたくさん打ち合わせをして臨みました。結果、ダンスが好きなラオスの子どもたちも一緒に踊ってくれて大盛り上がり。みんなで頑張った練習した成果が出て、そして子どもたちも喜んでくれて、うれしい気持ちとともに一安心しました。運動不足の大学生組は1回目踊っただけでお尻と足がバキバキになり、筋肉が悲鳴を上げていましたが、メンバーとの絆も深まり、大満足のパフォーマンスができました。



最後に子どもたちとの交流。運動後ドリンクを配って支援したスポーツ用品や折り紙などで一緒に遊びました。言葉が伝わらない中、ジェスチャーを駆使して仲良く遊ぶことができました。支援物資に興味津々で、目を輝かせながら満面の笑みで遊んでいる子どもたちの姿が印象的で、支援活動が与える影響や誰かの役に立っているやりがいを実感し、活動に携わる意義を再度感じることができました。



2. 医療機関の訪問

医療機関の訪問では、ヘルスセンターと群病院を訪問させていただきました。

ヘルスセンターでは主に予防、治療、啓発の3つを軸に活動しており、治療という病院の役割に加えて、予防と啓発という保健的な機能も担っている施設でした。ヘルスセンターの特徴として、啓発活動にヴィレッジボランティアとして地域を支える役割の人々がいると知り、ボランティアの方々は地域住民に啓発活動を行うと引き換え

に医療費が無料になる仕組みになっていました。医療機関や医療従事者が不足した環境の中、地域を巻き込んで運営している施設を見学する貴重な経験ができました。

対して群病院は主に予防、治療、訪問の3つを軸に活動しており、治療という病院の機能に加えて、予防という保健的な機能、訪問という訪問看護的な機能を担っている施設でした。

2つの医療施設の訪問を通して、ラオスなどの発展途上国の医療は日本に比べて予防に重点を置いていることがわかりました。特に母子保健に関しては、母子手帳を活用した教育に感心しました。日本に比べて妊娠・出産に関する情報が少なく、医療機関の受診回数も少ないため、母子手帳に妊婦さんの禁忌事項や食事摂取バランス、妊婦の危険信号などイラスト付きで詳しく説明されており、日本発祥の母子手帳を自国の医療に合わせて改善して活用していることを学ぶことができました。



3. ラオスの文化

ラオス2日目の朝に初めて托鉢という修行に参加させていただきました。早朝6時半にホテルを出発し、みんなそれぞれ購入したラオスの伝統衣装の「シン」や「パービアン」を着て修行に参加しました。日本とは異なるカラフルなお寺で壁から天井にかけて手書きの仏様がたくさん描かれており、まるで異世界で不思議な感覚でした。



ヴィエンチャンの夜市にも行きました。トゥクトゥクを予約してホテルから夜市へ移動。ラオスに来たからには絶対乗りたい！と思っていたのでうれしかったです。またラオスには値切る文化があると知り、買い物の際は電卓やジェスチャーを用いて値切りに挑戦。多少はぼったくられているとは思いますが、よい経験ができました。夕食後、夜市の遊園地で手動の観覧車に乗りました。1周は30秒程度で周れますが、乗車時間は5分でした。スピードが速いせいでゴンドラの揺れがひどく、窓もないので、日本の観覧車では感じるののできないスリルを感じることができました。ラオスのローカル感を味わうことができ、夜市を大満喫しました。



最終日の飛行機の時間が迫る中、大急ぎでヴィエンチャンの観光地を回りました。黄金の仏教寺院タートルアンとラオス版凱旋門パトゥーサイに行きました。パトゥーサイでは、外観の迫力を楽しんだ後、集合時間10分前になって頂上に登ってみたいくなり、筋肉痛の足をたたきながら大急ぎで階段を上り、記念撮影をしてヴィエンチャンの街並みを一瞬堪能するという短時間で充実した時間を過ごすことができました。



ラオスに行くことを友達に話しても「本当に大丈夫なの?」「何でそんなところ行くの?」と反応されてしまい、旅のスタートは内心不安でいっぱいでしたが、ラオスのゆったりとした心安らぐ雰囲気や人柄、そして何より共に過ごせた仲間たちのおかげで不安は吹き飛び、思いっきり笑って楽しむことができました。頼りなく、わがままなリーダーだったとは思いますが、支えてくれたみなさん、本当にありがとうございました。ラオスでのかけがえのない時間を共有できたことに感謝しています。

「自分の力で支援に携わりたい」という自分の原点となる思いを、今回のスタディツアーで改めて確かめることができました。現地の子どもの笑顔や発展途上国の現状に触れ、看護で学んできた知識をどのように生かすのか考える機会になりました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。今後は4年生として国家試験の勉強に励みつつ、自分の将来を見つめ直し、今回の経験を糧に、国際支援に携わる看護師として一生懸命頑張ります。

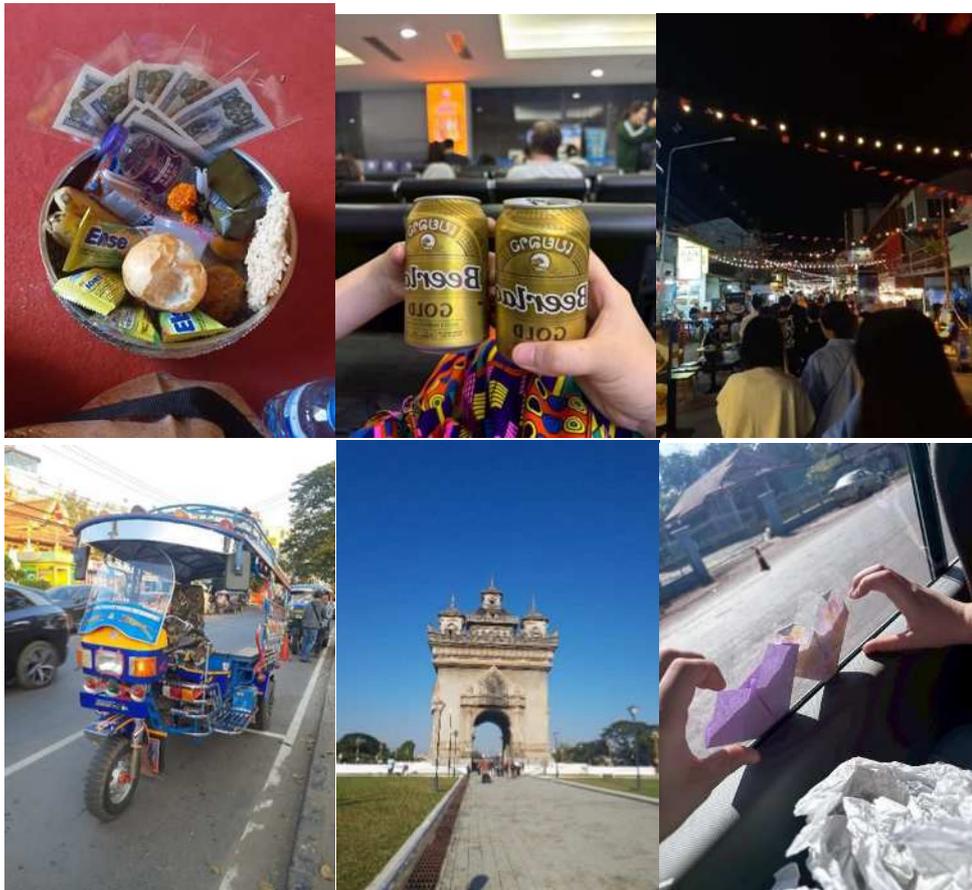
ラオスタディツアーでの学び

鹿児島純心大学看護栄養学部看護学科2年 立迫うらら

私は現在、養護教諭を目指して勉強しています。将来は、養護教諭として鹿児島の学校教育に携わりたいという目標があり、今回はその目標への第一歩として、海外の学校教育の在り方、看護の在り方を学ぶためにとても貴重な機会をいただきました。これからも海外での教育事業に積極的に参加したいと考えており、まずは自分の目で見て、学びたいと思い今回参加を決めました。

純心大学からは一人のみの参加ということもあり少し不安でしたが、それ以上に初めての海外であること、自分が専攻している看護、教育を同時に学ぶことができるということでもっと楽しみにしていました。

そうはいつでも私はラオスのことはほとんど知らず、出発前日まで課題レポートに追われていたため、ラオスではすべて忘れて楽しもう！という気持ちで大きな期待を胸に出発しました。



★言葉のこと

ラオスに行くにあたり夏ぐらいからアプリで少しずつ単語を勉強していましたが、実際現地に着いてみると挨拶以外すべての勉強してきた文章を忘れ、ラオスでの生活の中では基本的に英語で伝えていました。伝わっているのかは分かりませんでしたが、自分の思ったことをしっかりと伝えるということの難しさを感じ、言語を勉強することの大切さを感じました。

ラオス現地の方々は、私が言語を理解できていないとわかると、物を使って実際に見せて説明してくれるなど工夫して私に伝えてくれました。積極的にコミュニケーションをとり、失敗を恐れず挑戦することが大切だと感じました。

★食事のこと

ラオスでの食事は日本では体験できないたくさんの体験ができました。日本では手で食べ物をつかみ食べる文化がありませんが、ラオスで手づかみで食べ物を食べることができ異文化の食事を実際に体験することができてとても楽しかったです。



★ラオスの医療について

ツアーの中では、ラオスの病院と保健センターに行かせていただきました。私が一番驚いたことは処置室や分娩台が簡易的なつくりであるということです。分娩台の素材も固く、足を乗せる所も鉄であったことから、出産できる環境は整ってはいないもの、ここで出産するのはとても大変であることが想像できました。

病室の中には出産中に何かアクシデントが起きた時の対処法などもチャート式で掲載があり、限られた医療資源のなかで最大限にできる医療が提供されていました。小児科では実際に妊婦さんに配布している母子保健手帳を見させていただきました。日本のものに比べ、サイズも少し大きかったのですが、説明に加えてイラストもたくさん載っていたため、とても分かりやすかったです。乳児が物をのどに詰まらせたときの対処法なども記載があり、出産までの知識に加えて、家で実際に子育てするときにも役立つ知識もこの一冊から学ぶことができると感じ、母子保健手帳の重要性を実感しました。

現在、ラオスの1歳未満の乳児の予防接種率は96%であり、村にいる健康関係のボランティアの方々によって予防接種の啓発、治療時の連携が施されています。しかし、ラオスの医療課題として助産師や看護師のなり手不足、財政が豊かではないため予算が確保できないという現状があります。医療技術は向上してきてはいるものの、財政面での医療支援の必要性を認識しました。



★ラオスの教育について

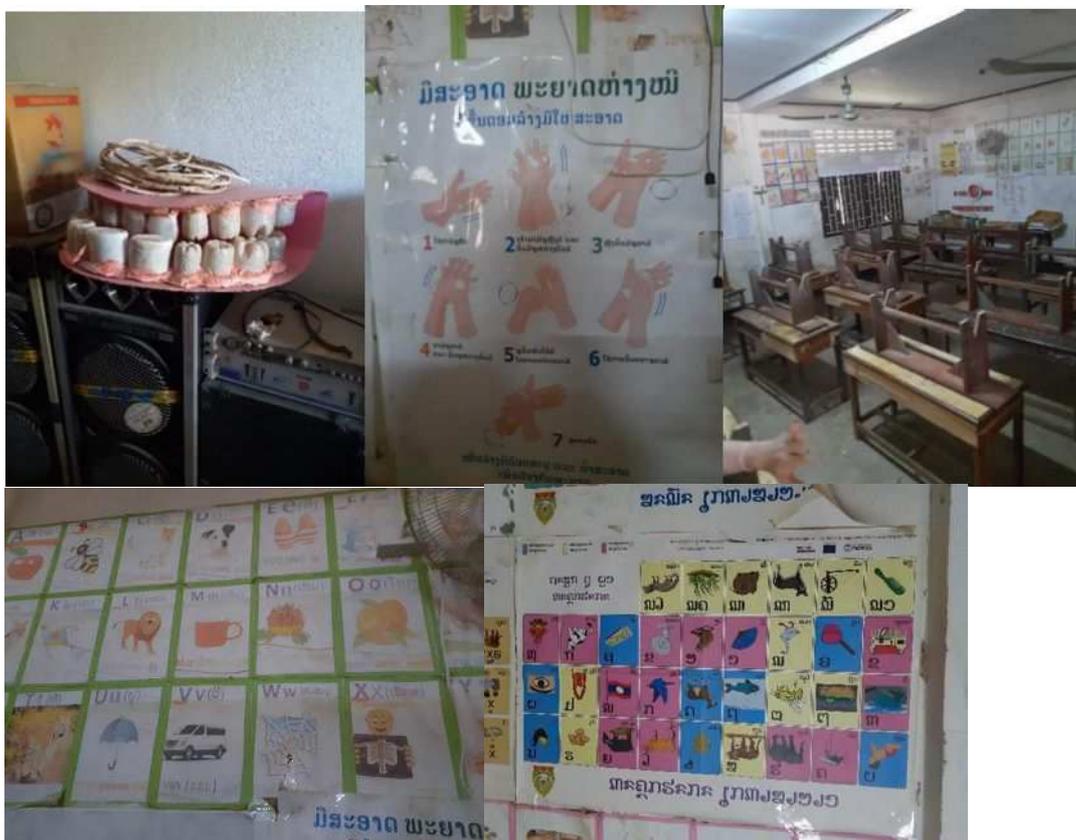
小学校に到着すると元気いっぱいの子供たちの笑顔に癒され、とても幸せな気持ちになりました。最初はみんなと仲良くなれるか不安もありましたが、子どもたちと一緒にシャボン玉や折り紙をしていくうちにだんだんと子供たちとの距離が縮まっていきました。ラオス語で書いた私の名札を見て、名前を呼んでくれたり自分で作った折り紙を私に見せにきてくれるなど、とにかくかわいかったです。



今回は、まだ支援を受けておらず支援を必要としている小学校にも行くことができました。教室の壁にはアルファベット表や手洗いのポスターなどたくさん掲示してありました。また、教材として歯の模型や教科書なども置いてあり、日本の学校とあまり違いのない教室でした。実際に授業を行っている様子を見ることはできませんでしたが、他国の教育の在り方を実際に現地で確かめることができました。

サイモンコン小学校では、朝の体操や手洗いが習慣になっていると聞きました。実際に手を洗っている様子を見ることはできませんでしたが、学校保健の現状を知ることができました。

じゃっどからの支援品の中には、せっけんや歯ブラシ、歯磨き粉など、衛生用品がいくつかあります。実際に衛生用品があることで実物を使っての手洗いや歯磨きなどの子どもたちへ学校保健に関するサポートがしやすいのではないかと感じました。



★最後に・・・

ラオスでの1週間は今までに感じたことのない異世界の空間でした。交通量、食事、文化・・・すべてが私にとって刺激であり、毎日が充実していました。また、自分の中での固定観念がすべて崩れた1週間でもありました。私が1番不安に思っていた「言葉の壁」では、多少何を聞かれているのか分からず、戸惑うこともありましたが、自分から積極的に英語で話しかけることで、相手にも伝わることを

学びました。お寺に行くと托鉢の仕方を教えてくれたり、小学校では帰り際に大量のガムをもらうなどラオスの方々のたくさんのやさしさに触れることができ、とても温かさを感じた1週間でした。実際に現地に行き、体験することで、たくさんの学びを得ることができ、自分の夢に向かってこれからも全力で頑張っていこうと思えました。最後に、一緒に学んでくれた高校生、先輩方、そしてこのような貴重な経験の機会をくださり、引率をしてくださった先生方へ心から感謝申し上げます。

そして今回の旅を支えてくださった現地の方々へ「コップチャイ！！(ありがとう！！)」



スタディツアー報告書

川内高校2年 宮坂薫子

私は今回、スタディツアーでラオスを訪れ、教科書だけでは学べない多くのことを現地で体験した。

特に、現地の小学生とのふれあいや、ラオスの街並み、現地の人々の様子などが心に残った。

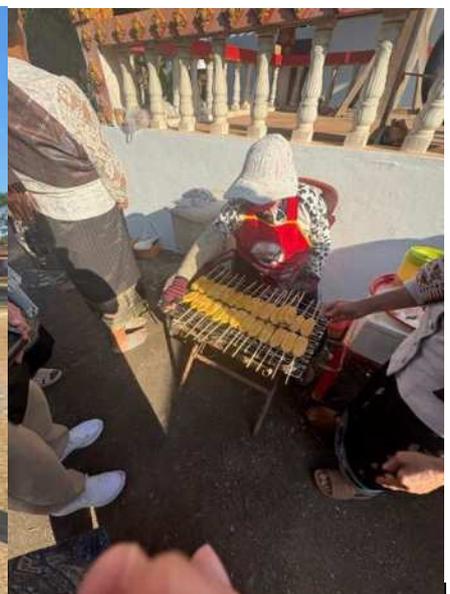
最初の小学校を訪れた時、私は小学生がコソコソとこちらを見て喋っているのを見て、そうだな。急に知らない外国人が来たのだから、話したくもなるし、あれこれ言いたくなるよね、と思った。しかし、遊ぶ時間になった時その印象はあっさりと覆された。みんなすぐにニコニコで寄ってきて、シャボン玉で一緒に遊んだ。言葉が通じなくても、大きいシャボン玉！と私が指さしてびっくりするとみんな笑ってそれを割ろうとしたり、シャボン玉をお互いに吹きあって笑いあったり、人懐っこい子ばかりで、来た時の不安はすぐに吹き飛んだ。また、学校によって子供たちの雰囲気も違い、教育のレベルも違っていたことに驚いた。英語が通じる学校、通じない学校、落ち着いた遊びが好きな子が多い学校、みんな外遊びをしている学校、それぞれに特色があった。それでもみんなに共通していたことは、言葉が通じなくても、最後には仲良くなって別れを惜しんでくれる事だ。どの学校に行っても、最後はみんなハグしに来てくれる。いつも子供達との別れが寂しくて、早くバスに乗って！！と先生方にせかさされながら後ろ髪引かれる思いで、帰りのバスに乗っていた。

ラオスの街並み、現地の人々の様子は日本とは全然違って、でもそこに私は魅力を感じた。日本と比べてゆっくりとした時間が流れており、自分に合っていて過ごしやすかった。店員さんもおしゃべりをしていたり、建物も色々な言語で表記されていたり、遊園地もゆるゆるだったりと見ているだけで楽しくて、もっとゆっくり散歩してみたかったなど



も思う。また、ラオスの人々も、道端で会っただけなのに挨拶をしてくれたり、日本人だと分かるとこんにちは！と言ってくれたり日本人と比べて、フレンドリーで、素敵な国民性だなと思った。

しかし、厳しい現実を実感したのも事実である。中国-ラオス鉄道の建設費の多くを中国から借金したことによって、ラオス国内で中国の影響力が増している。私がいたたった1週間でも、それを街の節々なら感じる事ができた。私は今回でラオスが大好きになったからこそ、この問題を深刻に受け止めている。これからも、ラオスが日本から安心していける国であってほしい、ラオスの国民が平和に生活できる国であって欲しいと願っている。



じゃっどスタディツアー報告書

川内高校 2年 北原三登

今回のスタディツアーを通して、沢山のことを学び、貴重な経験をすることができました。

小学校訪問の際、最初は子供たちが声を掛けてくれても意思疎通が出来ずもどかしい思いをしました。しかし、身振り手振りなどを使って一緒に折り紙をしたり、バドミントンやサッカーなどをして遊びました。持っていった絵本を一緒に読んでいた時、ラオ語の発音を教えてくれてみんなで音読できたのがとても嬉しかったです。それぞれ遊びたい道具を持ちニコニコと駆け寄ってくる姿や、校長先生の合図で一斉に元気いっぱいに「サバイディー」と挨拶する様子はとても可愛らしく、ラオスも日本も変わらないのだなと感じました。



ラオスで過ごす時間はゆったりしていてとても居心地がよかったです。日本では見かけない食材や、食べたことのない味付けの料理なども多く、食事の度にわくわくしました。なかでも衝撃的な食事は「かえるのからあげ」です。かえるだと言われなければ気づかないような味で美味しかったです。

また托鉢の為に寺院を訪れた時は、現地のお母さん方がお供えの方法をジェスチャーで教えてくださったのでスムーズに托鉢に参加できました。



ラオスが私にとって初めての海外だったこともあり、はじめは不安が大きかったですが、訪れてみるととても楽しい素敵な国でした。今では「またラオスに行きたいな」と思うほどです。沢山の方々に支えられながら充実した7日間を過ごすことができました。ありがとうございました。

第二の故郷、ラオス 川内商工高校2年 森山雄斗

ラオスめちゃくちゃ楽しかったです。私は、初めての海外だったので、行く前日までドキドキとワクワクで眠れませんでした！川内から博多まで新幹線に乗り、福岡国際空港まで、バスと地下鉄を利用して、いよいよ飛行機に乗ってハノイに！



左の写真はハノイ空港について食べたご飯です！

ブルコギバケットです！パンはとてもサクサクしていてお肉は噛み応えがあり、少しピリッとしていてとてもおいしかったです！この写真を見ているともう一回食べたくてしまいます！

次は、ラオス行きの飛行機に乗り、夜くらいに着きました

最初について思ったことはとにかく暑かったです、、しかも私は長袖を着ていたのでもなおさらでした。

ラオスに着いてから5泊6日ほど過ごしました

小学校を何校か訪問して支援をして、ソーラン節とラジオ体操を子供たちの前で披露しました。現地の子供たちはダンスや歌をそして体操を披露してくれました。なかには、振付が難しいものがあり、動きを覚えるのが大変だったものもあって「現地の子供たちはこんな難しいこともできるのか」と感心していました。そのあとはシャボン玉や、サッカー、跳びなどをして子供たちと遊んで交流をしました。現地の子供たちは何をしてもたくさん笑ってくれるのです。それが一番私は心に残っています。

次にラオスのご飯です！もうラオスのご飯はおいしいものばかりなのですが、唯一食べることに勇気が必要だったものがあります、それが**カエル**です。みんなが鶏肉みたいでおい

しいと言っている中、私はなかなか食べる勇気が出ませんでした、、、



左の写真がカエルです。味は本当に鶏肉だったものの、時間がとてもかかりました。もう、もろ足が見えて、口の中になかなか入れることが出来ませんでしたがとてもおいしかったです！！

さらにニンニクマシマシのガーリックライスとフォーもたくさん食べました！

現地の人たちはとてもやさしく皆さんとてもフレンドリーで、言葉は通じなくてもとてもかわいがってくれます。行く前は、とても不安で心配なことだらけだったのですが、いざ行ってみると、楽しすぎて日本に帰りたくなるほどでした。自分の素をおもいっきり出せた場所です。私は、ラオスが大好きになり、第二の故郷だとも思いました。いつかまたいける機会があれば、もう一度行きたいです。



人も街もあたたかいラオスで学んだこと

甲南高等学校 2年 新原勇希

学校で「今度、ラオスに行くことになったんだ。」と友達に言うと「え、どこ？ヨーロッパ？」「英語圏なの？」という返事が返ってきたのを今でも覚えている。実際のところ、僕もこのスタディツアーの存在を知るまではラオスについての知識があまりなかった。しかし、このスタディツアーから帰ってきた僕は「えっ！ラオス知らないの！？」と友達に言いたいくらいラオスを好きになった。そんなラオスでの旅を振り返りながら、このレポートを書こうと思う。

2025/12/25「暑いクリスマスがやってきた！」

- ・ハノイ行き便で、ベトナムの街を上空から見る事ができた。屋根に赤土を使うため、街全体が赤に染まっているように見えた。
- ・初めての海外での食事は、プルコギのバゲットだった。ピリ辛でとてもおいしかった。
- ・ラオスのワッタイ空港に着くと鹿児島島の夏のような熱気を感じた。ドルからキープに両替した。(65ドル)
- ・ヴィエンチャンのチャンタパニャホテルにチェックイン後、近くの商店街を散歩し、お店でタイ飯を食べた。仏教の国だがしっかりクリスマスをしていた。



2025/12/26「遊んで！買って！見て！食べて！聞いて！」

- ・サムケ小学校に訪問し、ソーラン節を披露した。(←帖佐先生にべた褒めされました！)バレーボールでバスケットをしたり、折り紙でびよんびよんカエルを作ったりして子供たちと遊んだ。
- ・お昼はカエルのから揚げを食べたのが印象に残っている。味は鳥のから揚げとほぼ同じだった。ココナッツも飲んだので熱中症対策ができた。
- ・ヘルスセンターで、ワクチンを保管している部屋や歯科設備を見学した。たくさんの寄付があって、成り立っていることを知った。
- ・ショッピングモールで肩掛け布を買った後、徒歩でヴィエンチャンのランドマークであるパトゥーサイ(凱旋門)を見に行っ。とても大きく天井の彫刻と模様がきれい

だった。

・夜はお鍋と焼き肉が同時に楽しめるラオス流バーベキューをした。お肉を食べながら野菜も食べることができて健康的な食事だった。ラオスに30年在住している虫明さんが来てラオスの伝統楽器「ケン」でジングルベルを演奏してくれた。



2025/12/27「朝から仏教に染まる！」

・5時起きで、托鉢に参加した。二日目に買った、肩掛け布を身にまどって、鉢にお金やもち米、果物などを入れた。僧侶さん修行ファイトー！

・お寺内では、いろいろな食べ物が売られていた。もち米で作った焼きおにぎりのようなものがとても美味しかった。

・2校の小学校に行き、ハンドオーバーセレモニーを行った。土曜日だったので生徒数が少なかったが、サッカーやバドミントンをして遊んでいた。バドミントンはとても人気があった。学校でお昼ご飯も食べた。

・バスの移動中、元首相の家や、放し飼いされている牛を見かけた。橋を渡った時には、川に浮かぶ家を見つけた。雨季には沈没してしまうのでは...？と感じた。

・夜はホテルのプールに集まり、Dマートと近くの商店街で買ったお菓子を食べ、おしゃべりなマンゴーシェイクを飲みながら、ゆったりおしゃべりをして過ごした。



2025/12/28「ちゃちい物の可愛さに気づく！」

- ・午前中は農園の見学に行った。果物、豚、鶏などを育てていて、グアバを試食したり、豚にえさを与えたりすることができた。トンボがたくさん飛んでいた。
- ・お昼にラオスのダムを見に行き、近くのお店で川を見ながら昼食を食べた。魚と豚肉の揚げ物や、パクチーと肉を炒めた料理がおいしかった。
- ・午後は一度ホテルに戻った後、トゥクトゥクに乗ってナイトマーケットに行き、雑貨や服などのお土産を買った。ナイトマーケットはぼったくられるので、「cheaper, cheaper」と言って値下げしてもらわないといけな。パチモンだとわかっていながらも、そのちゃちい可愛さにひかれてサングラスを買った。
- ・ビアラオのお店で夜ご飯を食べた。ここで、一つほっこりする出来事があった。お店でギターを弾き語りをしている人がいて、ハッピーバースデイトゥユーを歌い始めたので、じゃっどメンバーも手拍子をして一緒に歌った。そうしたら、その日誕生日だった女の子がケーキを自分たちのテーブルまで持ってきてくれたのだ。とても心が温かくなる出来事だった。
- ・ご飯を食べた後、メコン川沿いの遊園地に行き観覧車に乗った。これもまたかわいらしく、手作り感があふれていた。回るスピードが普通の観覧車に比べて速いため、一周しても止まることはなく、5分間も乗り続けさせられたのが面白かった。



2025/12/29「旅も終盤戦！」

- ・群病院の見学に行った。生後6日ほどの赤ちゃんがとてもかわいかった。病院の設備は自分が思っていた以上に整っていた。
- ・お昼はカオピヤックを食べた。麺が米粉で作られていてもちもちしており、豚肉がとてもおいしかった。替え玉もしてもらい満足だった！
- ・この日行った学校には小学生と中学生がいてとても賑やかだった。サッカーが上手な子が多く、有名なサッカー選手の真似をするとすごく喜んでくれた。ソーラン節の発表が最後だったので、サイン付きではっぴを中学生にあげた。
- ・ラオスでの最後の晚餐はラオスを全く感じない、ピザ屋さんだった。たくさん食べて、たくさん話せて楽しかった。店の外で、紙に願いを書いてオリーブの木に飾り付けた。願いが叶いますように...



2025/12/30「コップチャイ！ラオス！」

- ・最後の学校訪問に行った。子どもたちはエクササイズと読み聞かせを披露し、じゃっどは、子どもたちと一緒にじゃんけん大会をして日本のお菓子を配った。合図はラオスで1、2、3を意味する「ヌン ソン サン」だ。写真を撮るときにもこの掛け声を使っていたのでとても印象に残っている言葉だ。
- ・お昼はカオソーイを食べた。平打ち麺でとても食べやすく、おいしかった。
- ・午後は黄金に輝くタートルアンを見にいった。とても豪華な建物に見えて、実はペンキ塗りというのがかわいかった。また、パトゥーサイ(凱旋門)にもう一度行く機会があり、屋上に上ってヴィエンチャンの街を一望することができた。
- ・大きなショッピングモールにも行き、お土産を調達した。カートを持ったまま乗ることができる、エスカレーターもあり便利だと思った。
- ・ラオスのワッタイ空港で自分の英語力を試そうと、海外の方に話しかけた。その方はベナン出身のクレドさんで、JICA でラオスの家庭や子どもたちに支援する活動をしているそうだ。主にラオスのサバナケットという地域で活動をしているそうで、モモンガやリス、虫を食べる文化があることや生活の様子を教えていただき、とても勉強になった。
- ・ベトナムのハノイ空港でフォーを食べて、お土産屋を少し回った後、朝の1時まで寝て過ごした。





2025/12/31「無事帰還！」

- ・飛行機では機内食が出たが、食べている途中で眠気に勝つことができず、寝落ちしていたら、いつの間にかご飯が回収されていた...
- ・無事福岡に到着した。福岡空港に入ると、「トイレがきれい」「空気がきれい」といった声が聞こえてきて、衛生面の設備が整っていることへのありがたみをしみじみと感じた。

活動後の感想

◎実際にラオスの小中学校を訪問して、元気いっぱい目をキラキラさせている子どもたちと運動したり、折り紙をしたりするなかで言葉を使わなくても交流はできるということを改めて感じ、学校に通えることは、すごく幸せなことだと思った。しかし、メコン川沿いの小さな遊園地に行った時、子どもがお皿を持って来てそこにお金を入れるよう求めてきた。ジェスチャーをして断ると、お母さんの元へ戻っていった。この出来事を経て「この子どもは学校に行けているのだろうか？」と不安になった。また、首都のヴィエンチャンでも物乞いをする人がいるとなると、まだ発展が進んでいない地域はどうなっているのかという疑問もわいてきた。

◎タートルアンでは 65000 キープで売られていた Tシャツがナイトマーケットでは 75000 キープで売られていたことから、きっとタートルアンのお土産屋の値段が正規で、それを仕入れて 1 万キープも値上げして売っていることがわかった。まさに転売ヤーだなと感じたと同時に、お金を稼ぐためにはしょうがないことだとも感じた。

◎食事は小さい籠のようなもち米入れが印象的だった。そこに入っているもち米を手でつかみ取り炒め物などを一緒につかんで食べるのだ。一回だけ挑戦したが、衛生的に不安だったので、結局箸で食べた。ラオスの食事はパクチーやピリ辛の食べ物が多いが、自分はどちらも食べられたのであまり困ったことはなかった。

◎ラオス語はグーグル翻訳で発音が出てこないのに、ラオスの方が話しているのを聞きながら、よく聞く言葉を(検索欄：ポーペンニャン ラオス語)という感じで調べながら覚えていった。スマホのメモ機能に売って振り返れるようにした。

◎街の中には野良犬がいたるところにいて、日本では見ない光景であるから新鮮だった。人の病院さえまだ完璧に整備されていないのに、動物保護施設や動物病院はもってのほかだと痛感した。また、電線は古くて使えなくなったものを残したままで新しいのを付けるため、電柱が見えないほど電線が垂れ下がっていた。

まとめ

昔の自分は、人生初の海外でラオスに行くなんて予想もしていなかったが、このスタディツアーに参加して、様々な文化の違いに触れるなかで、本当に「百聞は一見に如かず」を実感した。これからも、自分が知らない世界に羽ばたいて様々な文化に触れて様々な発見をしていきたいと思う。このような素晴らしい経験をさせていただいたことに感謝して、自分の夢である「生物学者」になるためにこれからも勉強に励んでいきます！

ラオススタディーを通して

れいめい高等学校1年 萩原心咲

1.参加目的

今回のツアーに参加した目的はラオスの生活や文化について学びたいと考えたからである。私は中学生の頃から異文化についてとても興味があり、学校でこのツアーのポスターを見た時、参加したいと言う衝動に駆られた。

2.活動内容

ラオスでは、たくさんの小学校を訪問した。どこの小学校もきれいで可愛い女の子たちが音楽にあわせて、巧みな足踏みとしなやかな指遣いでダンスを披露してくれた。「3ドルもらって5ドル返す」これが指先の動きらしい。だが実際やってみると難しい。踊れるようになりたくて真剣に観察を続けたが、時間をかけなければ無理かもしれない。

子供たちのパフォーマンスが終わったあと、一緒にバレーやバドミントン、折り紙、縄跳びなどいろいろな遊びをした。日本語も英語も通じなくて、言葉が全然伝わらない。だけどジェスチャーでなんとか乗り切った。ドンサヴァン中学校で、一つ下のすごい美人な女の子2人と友達になれたことがとても嬉しかった。

また、地域の保健センターや郡病院など医療機関にも訪問した。そこでは、小児科や産婦人科を見てまわった。十分な医療が備わっていない、簡易的なエコーや分娩室があったのが印象的だった。

午前中に小学校や医療機関を訪問した後は、トゥクトゥクに乗ってナイトマーケットに行ったり、遊園地で観覧車にのったり、ホテルの近くのDマートでお買い物をしたりした。屋台でははじめてみる料理がたくさんあり、ドキドキとワクワクが止まらなかった。いつかまたラオスにいき、屋台料理を堪能したい。最終日にはパトゥーサイやタート・ルアンに行った。時間に追われバタバタしていたが圧巻の美しさだった。なかなかハードなスケジュールだったが、色々な経験ができてとても楽しかった。



3.印象に残ったこと

特に印象に残ったことは、人がみんな優しくかったことだ。托鉢のときお米のお供えの仕方がわからなかったが、近くにいた女性が手本をみせてくれた。その女性は小学校の校長先生であったことがあとからわかり、自分の娘と私が似ていると実の娘のように親しく接してくれた。それがほんとうに嬉しくて、私の中ではもうラオスのお母さんだ。小学校の子供たちはとても人懐こくてお別れの時ハイタッチやハグをした。心の距離が近くなった気がして嬉しかった。

またご飯がとてもおいしかったことも印象的だった。ツアーに参加する前はラオスのご飯をしっかり食べられるか不安だったがそんな心配は無用だった。焼肉と鍋が融合したラオBBQやチャーハン、意外にもカエルの唐揚げが絶品だった。最後にラオスは発展途上国であると聞いていたが、実際行ってみるとビエンチャンはすごく賑やかで発展途上国であることが不思議なくらいだった。だが農村部に行ってみると、道は舗装されておらず、医療水準もあまり高いものではなかった。都市部と農村部の格差が大きいことを身をもって実感した。



4.日本との違い

日本と比べるとやはり衛生環境があまりよくないと感じた。まずトイレが全く違う。基本トイレトーパーは流したら詰まってしまうので近くのゴミ箱にすてる。ゴミ箱がなく近くに手桶がある場合はそれで水をすくって流す。トイレに行く時は必ずトイレトーパーを持ち歩かなければならないと思った。次に気になったのは食事中的ハエの多さだ。料理の匂いに釣られて大量のハエがご飯にたかる。はらってもはらってもいなくならなくて、最初はずごく抵抗があったが、後半諦め気味になった。ラオスの人はあんまり気にしていない様子でびっくりした。ラオスに行って改めて日本が綺麗か気付くことができた。

5.今後に活かしたいこと

今回のツアーでラオスについて学ぶことができてよかった。この経験で視野が広がり、将来について深く考えるきっかけとなった。また言葉や文化が違っても、相手の立場に立って行動することの大切さを学んだ。思うように伝わらない場面も多かったが、表情や態度、工夫次第で気持ちは伝えられると感じた。この経験を今後に活かし、どんな環境でも相手を理解しようとする姿勢を忘れず、自分から行動できる人間でありたい。



1
土村 紅葉

ラオスの学校について。

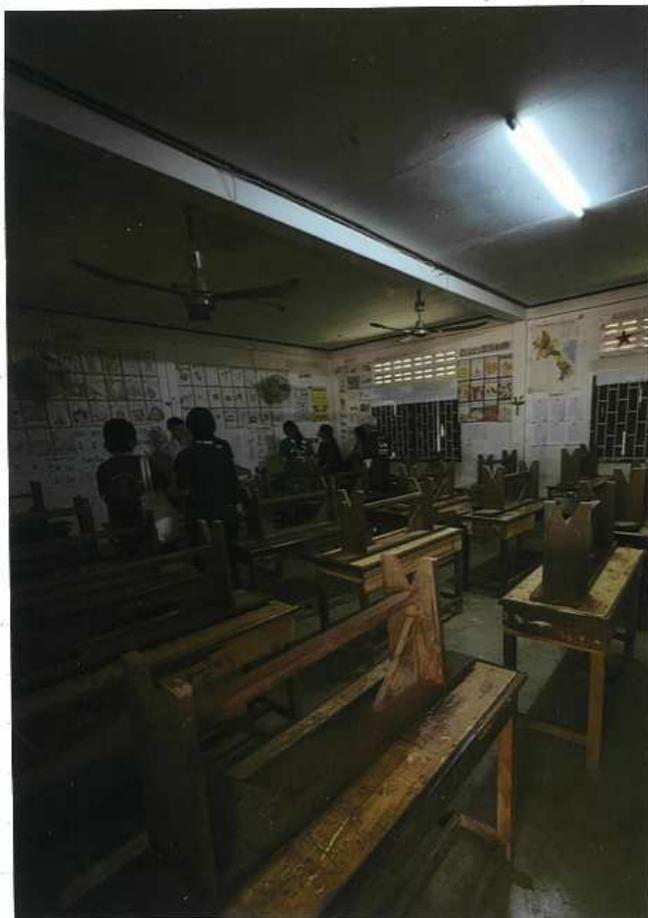
○ 学校の環境

ラオスの小・中学校は、動物や植物などたくさんの自然に囲まれており、校庭は広々としていた。校舎は低く横に長い建物が多く、日本のような大きな建物はなかったが、地域に根付いた暖かい雰囲気を感じた。同様に、子ども達も親切で暖かく出迎えてくれて、外で元気に活動しており、学校生活の中で自然と触れ合い機会が多いと感じた。

○ 設備について

教室の中はとても暗く、机や椅子は木製で古いものが多いが見られた。広い教室に黒板前の蛍光灯1本しかなく、窓もほとんど閉められていた状態で空気の流れも不十分であることが分かった。また、掲示物は手書きのものが多く、限られた教材の中で工夫して授業が行われていることも分かった。

特に印象的だったのは、トイレの環境で、トイレトイペーパーが流せないだけでなく、そもそもトイレトイペーパーが置いてない学校がほとんどだった。衛生環境や、学校の設備は、日本と比べると十分とはいえないと感じた。



○ 子ども達の様子

衛生環境や設備は不十分であるにも関わらず、子ども達は明るく、元気いっぱいだった。母語も国籍も違う私たちに対して笑顔で話しかけてきてくれたり、写真を一緒に撮ったりしてくれた。また、それぞれの学校で踊りを披露してくれて、胸が少なくても、楽しい気持ちや人を思いやる心が強いと感じた。

しかし、印象に残ったのは子ども達の明るさや人なつこさだけでなく、スマートフォンの普及状況だ。決して豊かとは言えない環境であるにも関わらず、多くの子ども達がスマートフォンを持っており、小学校低学年の子も持っている子どももいた。

このことから、近年は発展途上国でもスマートフォンが急速に広がり、生活の一部になっていることが分かった。一方で、教育環境や衛生設備が十分に整っていない中で、スマートフォンだけが普及している現状には、少し複雑な気持ちも抱いた。

学校の課題

小・中学校の様子を見て、何点かの課題があると考えた。
1点目は、設備、衛生面についてだ。教室や教材が十分とは言えず、特にトイレは、トイレトパーパーがないなど、衛生面で不安を感じた。私たちが、もっとできる限りのこととして、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりが必要だと思った。

2点目は、学習環境とスマートフォンについてだ。多くの子どもがスマートフォンを持っている一方で、学習環境は十分に整っていない。デジタル機器が先に普及して行くことに少し違和感を感じる。今後、教育に生かせる環境作りが大切だと感じた。

医療について

① ハウサイフォン地区保健センター

・医療体制の現状

ラオスのビエチャンでは、保健所や病院が住民にとっての重要な役割を担っていることが分かった。予防接種や、産婦人科、歯医者などの分野で活動が行われているが、医者や看護師、助産師などの医療従事者が不足している課題があった。そのため、医者一人一人にかかる負担が大きいという現状であった。

77チン接種

重要な活動の1つで主に子どもを対象に行われている。しかし、子どもは成長すると日付ごとに出稼ぎに行くことも多く、継続的な77チン接種が難しい場合もある。また、保護者の理解不足、情報不足により、77チン接種が後回しにされてしまうこともある。他にも、少女の早期妊娠や母子の健康管理も課題として挙げられている。



分娩室の



歯医者

ボランティア活動や海外からの支援により、研修や資金援助が行われ、医療の質を向上させる取り組みも見られている。

② ハイサイフォン地区病院

○ 医療体制の現状

フランスでは、医師や医療スタッフの数が非常に少なく、約2000人に1人しか医師がいない状況だ。そのため、十分な診療を行うことが難しい場面も多いと考えた。

○ 産婦人科の様子

産婦人科では日本と同様に妊娠さんの健康管理が行われており、母子手帳も使われていた。妊娠しているかどうかはお腹の心拍数を計り、妊娠しているかを確認し、赤ちゃんの様子を見る時は、エコー検査で行われていることが分かった。

分娩室の壁には、右下にある写真の形に出産時の手順が張られており、少し不安が残る印象が残った。

○ 小児科の様子

小児科を訪問した際、赤ちゃんが777を接種している場面を見ることができた。予防接種が行われていることから、病気を防ぐための医療が大切にされていることが分かった。限られた環境の中でも子ども達の健康を身寄り取り組みが続けられていると感じた。

○ 病院の課題

分娩室や診察室の医療設備が十分ではなく、不安定な出産や治療を行うための環境整備が必要だと思った。そして、医師やスタッフの不足により、一人一人に十分な医療が行き届きにくい点を、私たちができる限りのボランティアをして、助けたいと感じた。

図1-2: 正常分娩の管理

監視 少なくとも5分ごと 子供の心臓の鼓動

第二期陣痛 子宮口が完全に開く (10センチメートル)

子供の心臓の鼓動

出産の準備をする

1. 陣痛時の温度が25~28°Cであることを確認する (風がないことを確認する)
2. 女性のプライバシーの確保
3. 女性や女性と一緒に来た人に自己紹介をする
4. 出産直後の母親と新生児のケアについて話し合う
5. 正しい手洗いを実践する
6. 使用する器具に0.5%塩素消毒液など、適量とオキシトシンおよびその他の必要なアイテムを準備します。
7. 布を母親の股部または手の届きやすい場所に置きます。
8. よく似た色、赤ちゃんの足もつたために、互換性がない場所に別の布を使用する必要があります。
9. 新生児ケアのための場所を準備する

赤ちゃんが生まれる前に股が腫れるとき

1. 正しい手洗いを実践する
2. 鼓動が聞こえない場合は、臍帯を手を動かさずに観察します。
3. 臍帯や子宮頸部などの位置変位を修正するよう母親に勧めます。
4. 子宮の収縮に合わせて、お母さんが好きなだけ見るように促します。
5. 臍帯が分娩のペースに合わせないように観察を付けます。
- X すべての上向きで股を調整しない (突出がある場合のみ受動する)

出産する

- ✓ 出生時間と赤ちゃんの性別を告げる
- ✓ 赤ちゃんの出生重量を測定し、記録に記入します。
- ✓ 生後5秒以内に赤ちゃんを試き始めます (目、顔、頭、体、背中、臍、臍を丁寧に拭き、拭いている間に呼吸を確認してください)
- ✓ 出生後1分以内に新生児の呼吸を監視し、必要に応じて呼吸補助を行います。
- ✓ 出生後1分以内に新生児の呼吸を監視し、必要に応じて呼吸補助を行います。

1分

母親の股部または背中と腹の接触を避けます。

- 2番目の子供を産み、産後に戻ります。
- オキシトシン101mgを母親の上唇または大腿部の筋肉に注射します。
- 臍帯に汚染された手袋をかきます (担当者1人だけの場合)。
- 胎盤娩出 (助産師による臍帯のクランプのみ)
- 胎盤の検査

母親の臍帯が止まった後に臍帯を切る場合は、1分以内に切り取らないでください。

- X 出生後少なくとも590分までは赤ちゃんを母親から引き離さないでください。
- しかし、呼吸不全や介護が必要な場合には、母親の緊急事態
- 赤ちゃんに乳首Xの乳首が受けたら、授乳を勧めます。赤ちゃんが24時間経つまでは入浴しないでください。

5分

5分オキシトシン 101mg 次の場合にプロローブ

高血圧に対する計画を立てる

輸血チャート

最初の2時間、15分ごとに監視と支援を提供します。

- 呼吸が良好 (喘鳴なし、胸の圧迫感なし)
- 乳がきれい
- 湿度に暖かい温度
- 母乳育児の開始 (授乳困難の兆候、愛着)

母乳をやめた後

- テトラサイクリン系薬を使用して目のケアを行う
- 赤ちゃんの体重を測定し、母子健康手帳 (21ページ) に記録します。

若い世代を守り、信頼を築くために前線に前進するの妨げを

出生後4日目までの新生児のケア

④感想

今回 ボラニティア活動として初めての海外を訪れ、日本とは大きく異なる環境や文化に触れ、たくさんの学びと気づきがあり、とても濃い1週間だった。

ラオスの小・中学校では、衛生用品や紙本を寄付し、ITファーマスをお互いに披露し合ったり、遊び道具を使って子ども達とたくさん遊ぶことができた。言葉が全く通じなくても、一緒に笑い合ったり走り回ったりするだけで、楽しいものということが分かった。設備や衛生環境は日本よりも良いとは言えないが、ラオスの子ども達は大抵元気で明るく、一緒に写真を撮って、SNSでシェアするなど、国は違っても距離が縮まった気がしてとても嬉しかった。中には「ありがとう」「かわいい」などの日本語を使ってくれた子どもがいたり、おり紙やキーホルダーをくれた子どももいて、嬉しくて楽しいたくさん思い出ができた。

2つの病院に訪問し、分娩室や小児科、産婦人科を見学できた。母子手帳やエコー、ワクチン接種など、日本と共通しているところもあったが、分娩室は広い部屋にベッドが置いてあるだけで医療機器がほとんどなく、不安を感じた。

この見学を通して、日本の医療環境がどれだけ整っているかを改めて実感したと同時に、限られた設備の中でも医療が行われていることを知ることができた。もっと設備がよくなって安心安全に暮らせる国になったらいいと思う。

ボラニティア活動にも、パトカーサイを見に行ったり、初のトゥクトゥクに乗ったり、初めてココナツを飲んだり、日本では出てこなかったパクチーやカユル、アヒルの肉が出てきたり、皆で民族衣装を着てお寺に行ったり、夜はホールのナイトプールでほしゃいだりして最初は不安だったけれど、慣れておもしろい皆のおかげでとても素敵な体験をすることができた。特に思い出に残っているのはナイトマーケット。ナイトマーケットでは、キーフを使ってTシャツやポーチなど、たくさんのお土産を買った。中には、高い値で売りに付けてくる店も少しあったが、ラオスにしかないものを友達とおそろいで買ったり、現地の人と話したりするのは新鮮で楽しかった。

ラオスのスーパーマーケットに行った時、店員がスマホをさわっていたり、鼻をほじっていたりしているのを見て、日本の接客はすごいなと改めて感じた。

日本は設備や制度が整っていて生活しやすい国だが、ラオスでは、交通ルールや人の目を気にしない所がとても自由でいい国だと思った。

今回のボラニティア活動を通して、ラオスという国を知るだけでなく、自分自身の考え方や価値感が大きく変わり、視野も少し広がったように思う。

最初はとにかく不安だった。初海外は、佐佐木夫婦、あきのさん、栗山さん、神崎さん、小畑さん、おさむさん方がたくさん誘ってくれてくださったおかげでラオスという国を好きになって、今持て1番楽しい旅になりました。このような機会を与えてくださり、本当にありがとうございます!!

2025年度 じゃっとスタディツアーへの参加を通して

2026.1.14

福岡看護大学 寒水 章納

わたしは普段、公衆衛生看護学分野で教員をしている。開学してまだ9年目となる本学では当初から国際的な視点をもつ看護師の育成に力を入れていたが、コロナ禍となり、国際交流が叶わずにいた。そのような中、本学学長と帖佐先生ご夫妻とのご縁があり、今回、視察を兼ねてツアーに参加させていただいた。個人的にはいろいろ思うままに書きたいが、今回は看護学生への教育という視点でまとめることにする。

①国際的な視点をもつ看護師の育成

まずスタディツアーに参加することで国際的な視点を養える利点がある。本学では今年度、先進国への国際交流を実施しているが、途上国であるラオスだからこそその学びがある。例えば、小学校を訪問した際、トイレの様子に驚いた。日本の和式に近い形式ではあるものの、トイレットペーパーもなければ電気もない。内側から引っかけて鍵をかけるのだが、少し気を抜くと開いてしまう。排泄後は大きな桶に溜まっている水で便器を流す。普段、快適な洋式トイレを使っているわたしは慣れるまで少し苦勞した。理子先生より、以前はトイレがなくじゃっとが建設したこと、手洗いの習慣はなかったが保健省へ働きかけ、ようやく学校の現場で学校保健の必要性が浸透しつつあることを教えていただいた。多くの途上国では先進国では稀な感染症に罹るリスクが高い。その1つの原因として、水やトイレなどの衛生条件の悪さが挙げられる。教科書レベルで学修していた内容を目の当たりにし、学生にもこの現実を自分の目で見てほしいと思った。



小学校トイレ近くの手洗い場：
確認した範囲では唯一、石鹼が置いてあった



小学校校庭にある手洗い場：
水が出ない学校もあった

また郡病院を見学させていただいた際、ラオスではワクチン接種や家庭訪問など実施しているが、妊産婦や乳幼児の死亡が高く、母子保健に力を入れているとのご説明があった。終了後、参加者の大学生2名より「日本の母子保健はどうなっていますか？」との質問があり、少しだけ話をすることができた。

このように他国の医療・保健の実状を知ることのできるスタディツアーは、自国の医療体制や公衆衛生について興味関心を高めることができ、ひいては国際的な視点を持ちながら医療人として成長できる貴重な機会であると考えられる。



郡病院の外來



保健省から配布される母子健康手帳：
妊娠期から出産まで1冊で完結する充実した内容

②次世代の海外ボランティアを担う人材育成

じゃっどのスタディツアーでは現地の方々の生活や文化に触れながら、ボランティア活動をしている。実際に小学校を訪問した際、長年の支援に対して記念式典が執り行われ、子どもたちがダンスを披露してくれた。その後、高校生と大学生が一緒になって「ソーラン節」と「ラジオ体操第2」を披露した。子どもたちは見慣れぬ異国のダンスに真似をしたり大笑いしたりととても喜んでいる様子だった。じゃっどからしゃぼん玉やバドミントンセット、サッカーボール、歯ブラシ、石鹸などの衛生用品の贈り物もあったが、しゃぼん玉で大はしゃぎしながら高校生と遊ぶ子どもたちを見て、現地の方々と触れ合うことも重要なボランティアの1つであると認識できた。子どもたちと楽しく遊んでいた高校生が「いろいろなことを考えます」「自分たちは恵まれているのですね」と呟いた姿が印象に残った。

今回、通訳として参加されていた方は高校生のときにスタディツアーに参加し、ラオスの魅力に取りつかれ、自身で語学留学してラオ語を習得された、とのことだった。

このように自身になにかできることはないか、と考えるだけでなく、自身の生活(生き方)を振り返るきっかけを与えてくれるスタディツアーはとても意義深く、将来の海外ボランティアを担う人材の育成につながっていると考える。



ラジオ体操第2を真似する子どもたち



子どもたちと折り紙を折っているところ
特に女の子に人気だった

③主体性、協調性、協働性の育成

今回のスタディツアーでは、高校生6名、大学生(看護学生)2名の参加があった。オリエンテーション時に大学生が手を挙げ、自らリーダーの役割を引き受けた、とのことだった。ハードなスケジュールのなか、ホテ

ル帰着後に集まり、パフォーマンスの段取りや練習をしていることを知り、生徒・学生の主体性と協調性・協働性の高さに驚いた。元々海外に興味があり、優秀で柔軟性の高い人材が集まった可能性もあるが、日本を離れた異国の地で生活しながらボランティア活動を行うことで、主体的に動く必要があること、周囲のメンバーとの調和を考えながら意見交換し、協調性をもって行動しなければならないこと、など、スタディツアーのなかで育成され、成長につながった部分も大きいのではないかと感じた。



ラオス風焼肉を堪能しているところ



最高のチームワークだった

以上のことから、じゃっどスタディツアーに参加することで、看護学生に限らず、様々な側面での成長が期待できるものとする。

【個人的な感想】

とにかく楽しく、穏やかな日々でした。参加者の高校生や大学生、そして現地の子どもたちに元気をもらいました。後半、体調不良となりましたが、病院を受診するという貴重な体験をすることができました（はあはあ言いながら、点滴やトイレの写真を撮りました・・・）。

温かく寄り添ってくださった帖佐徹先生、理子先生、弥生さん、荒田先生、愛花さん、高校生・大学生の皆さま、Nounou さんを始めとする現地スタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。今回の経験をこれからの学生教育に活かしていきたいと思えます。

2025 LAOS STUDY TOURに参加して

鹿児島純心大学人間教育学部

荒田 修

1 はじめに

今年度4月から、御縁をいただいて、薩摩川内市にある鹿児島純心大学で英文法や英語の教育法等の授業を担当しており、本学においてもスタディーツアーの案内をさせていただきました。その結果、看護科の学生が一人、参加してくれました。自分自身も、昨年に引き続き、一緒にラオスに行くことができました。昨年とはまた違った経験をすることができました。

2 ラオスに行って思ったこと

(1) 日程

今年は諸般の事情により、ホームステイができませんでした。昨年参加した生徒・学生がホストファミリーと濃密な時間を過ごし、ラオスの現実を体験できたことが大きな思い出になったことを考えると、少々残念ではありましたが、何分社会体制の違う異国でのこと、致し方ありません。しかしながら、昨年お世話になったフォンミーヌア村を訪問することができ、村長さんはじめホストファミリーの方々と「久しぶり」「元気だった？」と旧知の仲のように親しく交流することができたのは、とても意味があることだと思いました。しかし日帰りの、長距離・長時間移動は疲れました。



その代わりに、ビエンチャン特別市に長く滞在することができたので、ナイトマーケットや、ホテル近くのスーパー、最終日のマーケットなど、買い物を楽しむ時間が十分あり、高校生・大学生の皆さんも思う存分ラオスのお土産を購入することができたのではないのでしょうか。経済状況の違いも身に染みて理解できてよかったですと思います。

一方で、ラオスならではのお寺や施設を訪問する時間があまりとれませんでした。地方の村や首都の雰囲気を感じてみたいという機会も大変意義があると思います。ホームステイの方法等とあわせて、検討したほうがいいかなと思いました。

(2) 学校訪問

今年は小学校5校、中学校1校の計6校を訪問しました。それぞれの学校で、高校生・大学生の皆さんは全力でパフォーマンスをしてくれました。かなり体力を使ったことと思います。でもそのおかげで、ラオスの子どもたちとの距離がぐっと縮まりました。ラオスの子どもたちも民族舞踊等のパフォーマンスを披露してくれ、楽しい時間を過ごせました。(状況視察だけの学校もありましたが、そこでもココナッツジュースでもてなしてくれました。)

また、学校関係者だけでなく、村長さん、副村長さんも交えてのセレモニーでは、これまでの「じゃっど」の支援活動に対して、感謝の言葉が述べられました。加えて、さらなる支援の要望もなされました。本来であれば、村を含む地方公共団体が手当てすべき学校の補修や教材

の提供など、発展途上のラオスの教育事情を知り、私たちは何を、どのようにすべきなのか、考えさせられました。

(3) 食事

参加者の中には、苦戦している人もいましたが、食は生きることの基本、大元なので、その土地のことを知るためには、積極的にいただくことが大事だと思います。今回も特に、地元の人たちが利用している街中の食堂の料理は、本当に美味しかったです。しかし日本と同じ感覚で香辛料を入れてしまうと、あまりの辛さで咳が出て息ができなくなります。

(今年もビアラオをあちこちでいただきました。お土産にも買いました。本当に美味しいビールです。)

(4) 言葉

今年は、2か月くらい前から、サブスクでラオス語の勉強をしてみました。やはり文字が難しく、単語も簡単には覚えられませんが、少しずつ文法的な理屈や表現はわかってきました。それでも会話をするまでには遠く及ばず、各学校の授業の様子、特に英語学習の状況について、子どもたちや先生にいろいろ聞いてみたかったのですが、こちらがスマホのアプリでラオス語に翻訳して（アプリにラオス語の音声は入ってないので）相手に見せ、相手が日本語に直してこちらに見せる、という感じのやりとりで、タイムラグが生じることもあり、あまり詳しいことは聞くことができませんでした（それでも先生や子どもたちと会話を楽しむことはできました）。

しかし、英語はやはり便利だなと実感しました。ホテルやコーヒーショップ、本屋でもストレスなく英語でコミュニケーションができました。フォンミーヌア小学校の校長先生はある程度英語ができたので、ラオスの教育の仕組み等をうかがうことができましたし、ドンサヴァン中学校では、英語の授業があり、英語専任の先生がいらっしまったので、英語の授業について話をすることができました。教育制度上は小学校から中学校まで英語の授業はきちんと行われていることになってはいますが、実際は、経済状況が厳しいこともあり、教材がそろわない、英語を教える教師が少ないなど、苦労が多いとのことでした（ある生徒に聞いた時は、「英語の授業はない」と言っていたのですが、別の生徒が、「英語を教えてくれる先生がいる」と言って、この先生の所に連れて行ってくれました）。

(5) 街の様子

未舗装の道路が多く、あちこちで工事が行われていました（去年工事をしていたホテル近くの道路は、今年はきれいになっていました）。高度成長期の日本のように、ごみが散乱しており、これを改善するためにはどんな施策が必要なのでしょうか。

ナイトマーケットだけでなく、屋台村みたいなところも盛況で、夜には多くの人たちが、通りに椅子とテーブルを出して、食事やおしゃべりを楽しんでいました。アジアの最貧国の一つであるとか、経済的な格差が大きいとか、問題はたくさんあるようですが、人々は明るく、穏やかに生活をしている様子でした。外国人も多く、店先に高級外車が何台も停まっているところもありました。日本ではかなり高価なハイラックスのピックアップがたくさん走っているの

はなぜなのか大いに疑問です。

3 いろいろな支援について

学校の保健・衛生面の支援を中心とした子供たちの教育を支える「じゃっと」の活動がラオスのラオの人々にも大変感謝されていることがわかりました。

また、ラオスでは、現在は生活のために英語より中国語を勉強した方がいいということも聞きましたが、それでも国の施策として小学校3、4年生から英語を学ぶことになっており、その重要性は認識されています。英語が使えれば世界が広がるのは日本と同じですが、経済状況が悪いためにそのチャンスを得られないのは、個人レベルだけではなく、国の発展のためにも何とかすべき大きな問題だと思います。公立の学校とは別に私立の学校もあるそうですが、こちらは富裕層の子どもが多く通っていることもあり、潤沢な予算を使って、公立よりも洗練された授業が行われているそうです。また、英語ができる子どももいますが、そういった子は、別のスクールで勉強している、という話も聞きました。英語学習に限らず、教育の質の部分でも支援が必要であることを実感しました。

4 おわりに

今年もこのツアーに参加させてもらい、貴重な経験を楽しむことができました。同時に、言葉は本当に大事だ、ということを感じました（今回は小畑愛花さんのおかげで、昨年とは違ったラオスの表情を見ることができました。本当にありがとうございました）。街の人や学校の先生、子どもたちにいろいろ聞きたいことはあるのですが、ラオス語が分からず、もどかしく思いました。そこで、彼女に紹介してもらった本を購入して、勉強しようと思っています。



生徒・学生諸君も、日本ではほとんど知られていないラオスという国のいろいろなことについて、自分の目で見、自分で体験して気づいたことがたくさんあると思います。その気づきをこれからどう生かしていくかは自分次第ですが、みなさんはすでに自分の可能性を広げる大きな一歩を踏み出しています。まだ見たことのない世界は期待がいっぱいですね。

このツアーに関わっているすべての皆さんに感謝し、またお会いしてお話しできることを楽しみにしています。

本当にありがとうございました。



JADDO Study Tour 2025





2025/12/25~31



連載コラム

ラオスの 風に ふかれて

第2回 ラオスの伝統衣装「シン」と「バービエン」

じゃっと理事 小幡順子

昨年11月の愛子様ラオス訪問のニュースは、記憶に新しいところです。はにかんだ笑顔と上品な立ち居振る舞いとともに話題となったのが、ラオス側から贈られた「シン」や「バービエン」を身に着けたお姿でした。筒状の巻きスカートである「シン」や「バービエン」は、ラオ族の女性が結婚式や公的行事で身に着ける服で、紺や黒のシンは女の子の制服にも指定されています。



2025年度のスタディツアーよりシン着画

日本の着物に流行があるように、シンやバービエンにも流行があります。スカート丈や柄模様、柄の幅などに変化があり、毎年訪れる度に、その変化を見るのが楽しみになっています。シンやバービエンの織りや染めには地域性が強く、その布を見ると、どこで織られたものかが分かるといいます。一枚の布を作るには、綿や麻、桑の木などを育て、そこから繊維を取り出して糸を作り、織機で織るなど、何段階もの工程を要します。そのため、親から子へと集落の中で教え合いながら伝えてきたものであり、地域性が出やすいのだそうです。

こうした伝承も、絶えかけたことがありました。ラオス建国時の混乱やベトナム戦争の時代です。作り手たちが安全を求めて移動したことで、布を織る技術の継承が断たれかけたといいます。国が落ち着いた1990年代後半頃からは、国内外に散らばっていた作り手たちが故郷に戻り、技術継承のために設けられた作業所や工房での技術講習、古布の研究などを通して、昔の技術がよみがえりました。現在では、より細かな柄や染めの布を見ることができるようになっています。

かつては、自分や家族のものは自分で織るのが基本だったのですが、現在では店で購入することが多くなっています。手に入れた布は、①自分で縫う、②家族に縫ってもらう、③親戚やご近所の人に縫ってもらう、④仕立て屋に頼む、といった方法でスカート状のシンに仕立てます。仕立て屋が混んでいなければ、半日ほどで仕上がります。愛子様のようにスーツに仕立てる場合は仮縫いなどが必要なため、一週間ほどかかります。

じゃっとツアーなどの短い滞在では仕立てることは難しいでしょうが、お土産用の巻きスカートタイプのシンもあります。旅の記念に、一枚手に取ってみてはいかがでしょうか。





事務局便り

【重要なお知らせ】

NPO 団体になりすました迷惑メール・詐欺ページにご注意ください！

最近、NPO 法人じゃっどを装った不審なメールや、当団体とは無関係の「なりすましサイト」に、本人の意思とは関係なく登録されているといった事例が確認されています。

当団体とは一切関係のない第三者による行為です。NPO 法人じゃっどから、支援金の支給を理由に手数料の振込みを求めたり、個人情報の入力や登録を依頼したりすることは一切ございません。

不審なメールへの返信、添付ファイルの開封、本文内の URL クリック等は行わないよう、十分ご注意ください。

不審なメールや不審なサイトに関するご相談・ご連絡は、最寄りの警察署、迷惑メール相談窓口、または info@jaddo.or.jp までお願いいたします。

【令和7年度 ご寄付】

ご寄付、令和7年1月1日～12月31日の間に頂いた分です。

感謝の気持ちと共に、ご協力くださった皆様のお名前を掲載させていただきました。

■寄付金（以下敬称略）

| |
|---|
| 【岩手県】高木史江 |
| 【東京都】丹沢佳子 |
| 【広島県】澤田達男 |
| 【福岡県】姫野治子、床波千秋 |
| 【鹿児島県】三重浩子、山崎楓華、小畑愛花、丸田小百合、濱田時久、(株)サンフーズ、田中康代、若田吉朗、帖佐理子、帖佐徹 |

■印刷協力 (株)アクティブ

【じゃっど会員の皆様へお願い】

いつもじゃっどの活動をご支援頂き誠にありがとうございます。会員様の会費納入状況（会費有効期限）は、宛名シール内に記載してありますので、ご確認ください（今年度の会費の有効期間は、令和7年4月1日～令和8年3月31日です）※お振込みの際、用紙に内訳のご記入がない場合は、会費を優先に充てさせていただきます。

じゃっどの活動は皆様の会費に支えられています。

寄付金は税金控除の対象となります。

寄付金、随時受け付けております。

よろしく願いいたします。

ゆうちょ銀行：01740-2-170105

口座名：特定非営利活動法人 じゃっど

【じゃっど会員になるには？】

ラオスの子どもたちが健康に育ち、教育を受けられるよう支援する会です。活動継続のため会員を募集しています。年会費2,000円。入会希望の方は、氏名・住所・電話番号を事務局までお知らせください。





じゃっと INFORMATION

◆交流がつなぐ未来◆

—タイとの節目の年と、

日本との心あたたまる交流—

2025年10月、ラオスは国際関係の分野で明るい話題が続きました。タイとの国交樹立75周年を記念し、タイ首相が公式にラオスを訪問。両国は戦略的パートナーシップのさらなる強化を確認し、教育や保健、地域連携プロジェクトなど、さまざまな分野で協力を深めていくことで合意しました。長年にわたって築かれてきた信頼関係が、未来に向けて一層広がっていくことが期待されています。

また11月には、日本の皇室代表として愛子さまがラオスを訪問されました。現地の文化や人々との交流、社会活動に触れられたご滞在は、多くの関心を集め、両国の友好関係を改めて感じさせるものとなりました。皇室として初めての海外公式訪問の一つとなった今回の訪問は、ラオスと日本の絆をより身近に感じられる機会となりました。

ラオスが周辺国や日本とのつながりを大切にしながら、国際協力を前向きに進めていることが感じられます。

—ラオスことばひとつ—

ラオス語で「こんにちは」は「サバイディー (ສະບັບດີ)」と言います。出会ったときにこの一言を添えるだけで、場の空気が一気に和らぎます。朝でも昼でも使える便利なあいさつで、ラオスでは時間帯による言い分けがなく、夜でも「サバイディー」で大丈夫です。あいさつは、人と人をつなぐ最初の一步です。

■編集部より■

ご意見・ご感想、投稿は下記メールアドレスまでお寄せください。 ✉ info@jaddo.or.jp

ラオス話も、編集部一同心よりお待ちしております。

年末には、理事の皆さまそれぞれがビアラオを楽しまれたようです。

帖佐理事長は「WHITE」、

神崎理事は「GREEN」、

小幡理事は「BLACK」がお好みとのこと。

同じビアラオでも、それぞれの推しが分かれるのも楽しいですね♪



鹿児島市に開店したベトナム食堂さんです。フォーガイを食べました。

投稿：帖佐事務局長

編集後記

じゃっと新聞86号をお届けします。2026年度新年号兼スタディツアー特集号になります。昨年からは若い方々にも会員になっていただいて、活動自体には活気がどんどん出てきています。その熱気をお感じください。一方、相変わらず事務局体制は変わらず、諸事務手続きでは皆様にご迷惑をおかけしております。鹿児島県や薩摩川内市の担当部署にご指導を受けながら、今年こそは軌道に乗せたいと思っております。トランプ登場以来、いろいろと騒々しい世界になっておりますが、全人類の健康が守られるよう、微力ながら出来ることを地道にやっていきたいと思う年頭の所感です。(toru)